

# 協同労働と人間の発達を求めて

協  
同  
の  
こ  
ろ

癌 告知

大田原赤十字病院 看護師研修ドラマ・スクールでの実践(上)

荒木昭夫(協同総研顧問)

## < 1 . 発端と経過 >

大田原赤十字病院 看護師研修「ドラマ・スクールでの作品創り」を報告する。

「医療労働」のただなかに在るナースたちが、演劇の創造と言う「協同労働」に関わって、個々の人間形成と集団的自己啓発がどのように発達するのか、を実地で検証したいとの願いをもって、筆者はこの「研修」に熱中した。2001年の夏、そして2002年夏と、その機会が与えられたからである。

栃木県でのドラマ・スクールは2002年で199年になる。ドラマ・スクールとは「演劇的手法を使った、集団づくりと表現の教室」である、と私のなすドラマスクールの定義してきた。

劇団らくりん座はこの趣旨を戴して、一泊二日の泊まり込み研修を1984年夏から始めた。翌年からは栃木県教育委員会との共催となり、98年からは、とちぎ生涯学習文化財団の主催となって、毎夏欠かすことなく続けて来た。



01年では頭書のように、日赤・大田原の看護師一泊研修でもこのドラマ・スクール方式が採用された。「卒後4～5年研修」と言うから、各種の看護学校を卒業し、大田原の日本赤十字病院看護部門に就職し、現場での数年を経験した「バリバリの中

「堅看護師」を目指す若者たちの研修である。01年で、研修生24名、引率者として看護部部長1名、看護婦長2名、計27名が参加された。研修日、01年8月31・9月1日、場所、劇団らくりん座・教育演劇道場。

02年では、日赤・大田原の看護師18名に加えて、栃木県北部看護協会も共催となり、栃木県北部にある6病院からも8名が参加された。二年目には周辺に広げて...、となったわけで、研修日は02年8月28・29日であった。

私の「演劇の授業」は小学校でのそれと同じように、「絵」を描くことから始まる。

...「劇とは『劇しい』と書きます。激しく対立するものを、まず絵で描きましょう。例えば『太陽と雲』だとか・・・。」と言って、4駒マンガのように絵を組み合わせて話を立上げ、後は即興で創り上げるのである。

我々の掲げている課題 - 創造的活動のある協同労働は人間を発達させる - については、今回もまたはっきりとその成果を収めた。

以下に事例で説明する。

## < 2 . 「命 癌告知」(01年作品) >

いかにもこれは、看護師たちだからこそ作ることのできた即興劇であろうから、先ずその紹介から始めよう。

### 《病院の研修室》

医師の講義から始まる。聴いているのは看護師たち。

森本医師 今日皆さんに、インフォ - ムド  
コンセント(説明と同意)、癌告知

についてお話しします。

私はまず癌患者には100%告知を行います。いつ死ぬか分からないでいるよりも、死ぬまで生きがいを持ち、死を迎えるまで生きる目標を与える訳だ。たとえ癌を克服して5年生存出来た患者が、社会復帰をし、生活していて、再発が見つかったとする。それでも私はまた、告知をする。それが私のやり方だ！告知は医師の仕事となる。告知後の心のケア、いかに最良の治療を受けられるかは、あなたたち看護婦にかかって来るのです。患者に病名、残された時間を正確に伝える。それが私のやり方だ！

そしてナ - ス - ステ ションでは、新人看護婦はその「告知」に不安である。ベテラン看護婦は、その新人に指導する。

「先生の言う通り100%告知をしたほうがいいと思うわ。」

中堅の看護婦が言う。「待ってください。私は100%告知するのはどうかと思います。」

「でも患者さんが自分の病名を正確に把握していないのはどうかと思うの。」とベテラン看護婦。

「でも誰でも告知に耐えられるってわけじゃないと思います。その人の性格とかを見て判断しないと。それに、ドクタ - は告知をするだけですが、その後のフォロー - は私たち看護婦の手にかかっているわけですよ。」

その現場はすぐにやって来た。

看護婦2 先生、この前の飯村さんの検査の結果が出ました。

森本医師 じゃ、家族の方、呼んで。  
看護婦 2 はい。飯村さんのご家族の方、どうぞ。

森本医師 まず、この前の検査結果からお話しします。  
C T 出して貰えるかな。(カシャツ)

膵臓の全体像になります。血液検査、超音波検査も含めて、膵臓の広範癌と思われま。時折強い腹痛を感じたり、腹部がスッキリしないと自覚症状が出ており、かなりの進行癌だと…。手術をしても手遅れの状態です。残された時間も考えて、一日も早く治療を開始したいのですが、そのために、ご主人に病気を告知してもよろしいですか？

娘 間違いじゃないんですか。誰か、ほかの人のフィルムではないんですか？

森本医師 間違いではありません。

妻 少し考えさせて下さい。

森本医師 考えると言っても、時間がないんです。こちらとしては一日も早く始めたいんです。ご主人のことも考えて、すぐにお返事を下さい。お願いしますよ。  
(看護婦に)じゃ、後、頼んだよ。(去る)

看護婦 1 飯村さん。突然のことでびっくりされたでしょうけど、出来るだけ早く、考えてきて下さいね。

《病室で》

娘 お父さん面会にきたよ。調子どう？ 顔が少し黄色いけど、おみかんの食べすぎじゃない？

飯村 調子いいよ。もうすぐ退院できるよ。

森本医師、通りすがりに病室を覗く。

森本医師 ああ、飯村さん。丁度良かった。この前の検査の結果をお伝えしていいですね。(看護婦たちを見る)

看護婦 1 …えっ？

森本医師 ああ、奥さんいいところにいました。この間の検査の結果を旦那さんにお話ししていいですかね。え - 飯村さん。あなたは…癌です。この間の検査の結果、膵臓にかなりの進行癌が見つかりました。上腹部痛、身体のだるさ等、自覚症状も出ています。それで明日から治療を開始したいのですがよろしいですか？

飯村 どれくらい、生きられるのですか？

森本医師 酷なようですが、何もしないで2～3ヶ月。治療をすれば最低でも半年以上、生きられます。

飯村 少し考えさせて下さい。

森本医師 残された時間は少ないのです。もう家族の方にはお話ししてあるので、話し合ってください。とにかく一日も早く治療を始めたいのです。宜しくお願いしますよ。一緒に頑張りましょう。(外から覗いている看護婦に) ああ、いいところに居た。飯村さんにお話ししておいた

から、後は頼むよ。

( 去る )

飯村 お前たち、お父さんが癌だと言うことを知っていたのか。

妻 今、聞かされたの。

娘 内緒にしていたわけじゃないの。

飯村 治らないなら病院に居ても仕方が無い。家に帰る。

妻・娘 お父さん待って。

飯村 ( 振り切って出ていく )

妻 看護婦さん、どうなんですか？

娘 まだ何も相談していないのに。お父さんの気持ちも知らないで... ひどい！ ( 駆け去る )

新人看護婦 先輩、森本先生、家族の返事も聞かないで告知しちゃいましたけど、癌の告知ってあんなんでいいんですか？

看護婦 1 今のは先生も乱暴だと思う。飯村さん、立ち直ってくれるといいけれど。

《時間が経って》

看護婦たち 退院おめでとうございます。

飯村 お世話になりました。

妻 いろいろと、お世話になりました。

娘 ありがとうございます。先生に癌告知された時はショックでした。でも退院できて、残された時間を一生懸命生きたいと思います。先生や看護婦さんには、感謝しています。ありがとうございます。

看護婦たち お大事にしてください。

森本医師 じゃあ、飯村さんをそこまで送っ

て来るから。( 去る )

続けてこの作品でそれぞれの役を演じたナ - スたちの手記を読もう。

< 3 「命 - 癌告知」班のナ - スの手記 >

・「森本医師」を演じた 森本智恵子 ( A 館 小児科 )

何も無いところから一つのものを創りだす。最初は本当に出来上がるのだろうか？と、とても不安でした。他の人たちはどんな風に作り上げるのかがとても気になりました。自分の言いたい事、思ったことが恥ずかしさから、なかなか口に出せずにいましたが、時間をかけて考えていく間に、自分の考えを言っていかなければ作品が出来上がっていかないことに気づいた時、「どうせ創るならいいものになりたい」という思いが強まっていき、楽しくなっていました。一つの事に対してもさまざまな意見、考えがあることを感じ、その中で自分の考えを自分の言葉で表現し、自分をアピ - ルしていくことの大切さを感じました。自分を表現するということは、とても難しく勇気のいることだと思います。でもその勇気を出せるか、出せないかで自分の得られる物が大きく変わっていくものだと感じました。どうせ生きていくのなら、...仕事をしていくのなら、自信の持てる進み方をしたいと思います。自分が迷った時は、一人でも多くの人の意見・考えを知り、自分自身を見つけ出していかなければ、と思います。...演じている自分も、恥ずかしさを棄て、役になりきれたとき、相手を感動させることができた気がします。これからは、仕事の

上でも、周りの意見に左右されるのではなく、自分の考え・学びをしっかり持ち、イエス・ノ - をはっきり言える自分をアピ - ルしていけるようになりたいものです。

・「父」を演じた飯村中二

ドラマを創る事は、初めての体験であり、未知の世界でした。ましてグループで一つの作品を創り上げられるのだろうかと言う不安もあり、かなり困難を予想しました。

テ - マを決めるため、相反する事柄を挙げ、表と裏の世界からヒントを得て、何を訴え掛けるのかを一番の課題として取り組みました。話し合い、煮詰め、主張を通すべきところと、妥協すべきところ等、幾度もの調整を繰り返す事によって何とか作品を創り上げることが出来、満足感を覚えました。自分の役への思い入れがどんどん膨らんで、不思議な気分を味わいました。

このドラマスク - ルを通じ、人の思い入れが膨らんでいく風船の面白さと、はかなさを感じました。この研修を終え、いま一冊の短編小説を読み終えた気分です。  
(傍線筆者)

このように「感想」が記録された。傍線箇所から読み取れるように、他人を演じることによって、自分の中にある「役の人物」を理解していくのであった。

同じ病院と言えどもここは大病院だから、初めて出会った者たち同士。一泊二日の研修ならここまで出来て上出来だと言おう。この種の研修は、先ずは身近な題材から始めて、やがて高みに上っていく。

癌告知、ここでは殆ど「死の宣告」をされたような場面である。

医師と看護師のとるべき態度について言及しているが、患者と家族にとっての大葛藤は、さほどには突っ込んではいない。

看護師たちが真に患者や家族の内面を把握したいというほどの高いレベルの研修であれば、その場面を一場設けて、癌患者自身の心理、行動、その波紋から起こる家庭の中でのドラマ、にも立ち入るべきであったろう。しかしそれはまた次の時間でやることである。

確かに劇中《時間がたって》とあって、大事な所を「省略」している。嫌味な演劇人なら「書き込まれていない」と言ってここを指摘することだろう。しかしこの時の観客は、すべて病院の関係者であったから、その間の様子は十分に呑み込んで、それぞれの胸に落として咀嚼していたから、退院していく患者に寄り添い「そこまで送ってくるから」という森本医師のことばのニュアンスから、ここ何週間かの治療の間にいい信頼関係が出来たことを推量し、これを補って充分なのであった。

ここでは、医師の「告知」から忽然と立ち



現れた障壁に対しての「戦い」が始まるところだ。生死に関わる「ドラマ」の枠組みがこうして用意されたのであるから、鋭くその内容に踏み込むこと。これを避けてはいけないのだ、ということはある。そこへ踏み込んで逃げず、「ドラマを構築する」のも面白いところだ。

残された時間をどう過ごそうか、と「準備」する父の思惟。

その夫をどう支えようかと心を砕く妻。その両親を見つめながら、自分には何が出来るのだろうかと思案する娘。

家族の中の心の行き交いとその行動。これらに想いをめぐらせて場面を想定し、仮に私がその本人であったとするならばどうするだろうと、身を置いて、その心理を体験し、その人物の身になってこれを演じ切るとするならば、相当に水準の高い看護師研修となったことだと思われる。このレベルに達した研修ならばまさに「高い次元による研修」と言えるであろう。

では今一度、ナ - スの手記。「癌告知」班で患者の「娘」を演じた看護師、増淵貴子の手記を読む。

・増淵貴子（B館 4F病棟）

...劇を作ること何を得られるのか。不安や疑問があったが、対立するものを描いて、つなぎ、劇にしていく発想。その何気ないものが、自分たちの言いたいこと、考えたいことだと感じた。

自己表現は人それぞれ違うので、全て表に出せばいいとも言えないが、看護を行っていく上でもその人の表情、言動から感じ取っていく必要もあり、情報を得るヒントになった。

また、他の班の劇（注1）から「マイナス思考」がちの自分も、プラスに考えればもっと強くなれそうな気持ちになるように感じたり、先が見えてくるような気がした。「ストレス」を形にすると、どのくらいあるのか、たまったストレスをどうやって解消しているのか。何気ない事が自分にとってのストレス解消なのかと感じた。

看護婦（注2）だけでなく、患者の立場も表現することで、お互いの気持ちも理解していかなければならないと思った。これらの劇を作る過程、実際演技し、学んだことを今後の看護に生かしていきたい。...と。

先に述べたことは、本人たちも既にきちんと気づいていたのであった。

（注1） この日「癌告知」のほかに4本の即興劇が演じられた。題して「プラス志向の蚊とマイナス思考の虎」、「ストレス玉」、「ハエは何でも知っている」、看護部長と婦長がチ - ムを組んで演じた「流れと石」である。どの作品を取り上げてても面白いが、「ストレス玉」について次の話題としよう。

（注2） 02年3月までは看護婦（女性）、看護士（男性）と言いつけていたから、ここでもそのように使われている。02年4月以降は公的には男女を区別せず「看護師」と呼称することとされた。本稿でもその時間的経過が反映されている。

< 4 .[ ストレス玉 ](01年作品) >

看護師の一日を描くスケッチである。朝起きる。気分爽快。おっはよう！とナ -

ステーションに入る。

先輩看護師が先に来て待っている。「ドキッ！ 何かある。」

先輩ナースから玉が一つ飛んでくる。これがストレス玉だ。

「今日ね、〇〇さん、さんが欠勤なの。応援は頼んであるけど、今日はあなたがリダグよ。宜しくね。」またポンポンと玉が来た。

ああ、そんなこと言われても心の準備が出来てない、と思ったとたん、ストレス玉がまた一つ。

連絡が来た。「救急が入って、応援は出せない、ですって」、新人ナースの声が上ずってくる。ストレス玉がまた三つ。ああ重い、持ちきれないよう！

とにかく午前中は夢中で過ぎた。お昼の休憩！ ストレス玉の一つが消えた。指折り数えて、あと4時間、あと3時間、あと1時間。ストレス玉はまた一つ消えた。頑張れ頑張れ。ほら次の交代のナースの顔も見える、ストレス玉がまた一つ消えた。報告書を書いて、あとは引継ぎ...だけ、と言うとき、婦長が来て、

「トイレで呼んでる患者がいるよ。担当はあなたでしょ。すぐに行きなさい」。「ええっ？」またストレス玉だ。

「ああああ、自分勝手に点滴の針抜いたりして。駄目ですよ、何してくれるのよもう」。ストレス玉がどっと来た。

とにかく今日の仕事は終わった。ストレス玉は少しは消えたようだけど、何かすっきりしないなあと思ったら、ストレス玉がまだまだ沢山靴の中に残っていたわよ。これは一体なんのストレス？ お風呂に入って夕食をして、...ああ、忙しかったって寝転んだとたん、リリンと電話。えっ誰？ と思った瞬間、

間、ストレス玉がまたどっと。と思ったが、「ああ！」なんと相手は「彼」じゃないの。その瞬間にストレス玉は飛んで弾けて.....、と言う次第の即興劇。

降りかかるストレス、襲い掛かるストレスを、このチームは「ストレス玉」と言う「玉」で具象化して見せたのだった。

## < 5 [ ストレス玉 班のナースの手記 ] >

・石原須恵（A館 小児科病棟）

始めは本当に私たちだけで劇なんか創れるのか、私に演じられるのかと不安がいっぱいでした。グループに別れても、知らない人たちに自分の考えや悩みなど伝えることが恥ずかしかったが、話し合いの時間を多く貰い、少しずつだが自分を出すことができた。皆で意見を出し合ううちに、他人の悩みや自分の中の悩みが具体化することによって、今まで自分の中にあった、はっきりしなかった悩みやストレスの原因もはっきりしてきて、少しずつだが劇を演じることによって解消できたよい機会だった。

表現するということは、病院でも大切なことで、このドラマスクールを受ける前は患者や家族に対して大切な説明や指導をするときでも、平坦に話をしていたような気がする。自分が分かっているから相手も理解していると思い込み、言葉だけが流れていた事が多く、本当に伝えたいものに関しては、強調してはっきりと伝えるなど、気を使って伝えなければ相手に伝わらないのではないかと思った。今後は、相手の目、表情などを見ながら、ゆっくりと話をしていこう。



最終的にみんなが納得して行うことができました。劇を発表した後に、感想を聞いた時、私たちが理解して欲しいと思っていたことを、観ていた人の言葉で言って戴けて、「ああ、理解してもらえたんだ」と分かって、それは嬉しかったです。

相手に分かり

やすく、理解してもらえる表現、また相手も意見が出しやすい雰囲気づくりを心がけて行こうと思いました。

・村上智恵子（B館 - 3F病棟）

みんな、いろいろなことでストレスを感じているのだということを実感した。自分だけではないのだという反面、私自身もストレスを与える側になってしまっていることもあるのかなあ...と反省もした。他人の意見を聞いたり、演じたりすることで、少し他人の気持ちも分かったように思う。今回の学びを今後の生活に生かしていきたい。

・松本千香子（救急病棟）

ストレスと幸せについての劇を作りました。今までの私だったら、自分から意見を出すことが苦手で、相手の人の意見にいつも同意していることが多かったと思います。しかし今回は、自分が気づいた点については意見が出せました。またみんなが意見を出し合い、どの方法が一番良いかと話し合いました。いろいろな方法を試みて、何度も話し合うことにより最

・平山みゆき（C館 - 5F病棟）

その時はよく考えられなかったが、後になり振り返って見て、いくつかの「気づき」がありました。

目で相手に、「おいで、おいで！」と「来るな！」を表現する、またその逆の立場でその表現を感じ取るというものです。私はうまく感じ取ることはできませんでした。岡先生（らくりん座・俳優歴40年）と一緒にやってもらい、とても驚きました。「おいで！」の目はとても穏やかで、「来るな！」の目ははっとするぐらい恐ろしい目でした。まさに「伝える体・感じる心」を体験したという感じでした。そして考えました。私の心はいつも敏感にさまざまなことを捉えているだろうか。他の人

に「考え・意見」などを伝えているだろうか。

看護の場面で、患者はベッドに横になり、さまざまな悩み、不安、葛藤を抱えています。その想い、ちょっとした変化を私はしっかり感じ取れているのであろうか。患者のサインを見過ごしていることが多いのでは、と反省しました。

言葉であっても、表情であっても、本当に思い遣っていない態度はすぐに分かってしまいます。しっかり相手のことを感じ取って、つらいんだなという気持ちを理解した心をもてば、言葉でなくても、身体に触れたり、見つめたりすることで、相手に何かを伝えることができるのでは、と思いました。

私はこの心の動き、伝えるということをもっと考えなければいけないと思います。そういう自分になるためにはどうしたらいいのか。

考えました。そしてなんとなく分かったことがあります。グルーブで劇づくりをして、看護で伝える、感じ取るということに敏感でいられるには、自分が生き生きしていなければならないのではないかと。生き生きしているということは、心を開放して楽しむ時間がある。自分の考えをしっかり持ち、自己表現ができ、自分の心が時に悲しく、時に感動したり、さまざまに動いていることでは、と考えました。自分を表現できず、殻に閉じこもっていることはつらいことです。私は幼い時から自分の考えを伝えたり、人前で話すことが本当に苦手でした。今、そんな自分を変えようと思うと気持ちは楽になりました。

子どものように繊細な心を持つ青年は、こうして協同労働と創造活動の中で、精神の発達を続けるのである。(続く)